

『覆面既婚ノンケ男優タケ・上』サンプル

目次

登場人物紹介

前章

第一話 ノンケの限界シリーズ・タケ
(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

閑話一

第二話 競パンレンジャー・タケの敗北

閑話二

第三話 団地夫(つま)の爛れた午後

閑話三

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

登場人物

三室武明（みむろ たけあき）

34 歳。会社員。

平常時 7.3 センチメートル、勃起時 18.2 センチメートルの上ぞりの仮性包茎。
妻の吹子（ふきこ）と長男の征人（ゆきひと）、次男の宗臣（ときおみ）がいる。

戸川譲（とがわ ゆずる）

62 歳。工場経営。

武明の義父であり、工場経営に行き詰まり、あちこちに借金を申し込んでいる。

安藤（あんどう）

47 歳。ゲイビデオ作成会社社員。

武明が大学生の時に世話になったゲイビデオ作成会社社員。

戸川への支援をしようとする武明のために、様々な企画を提案する。

三橋（みはし）

26 歳。会社員。

武明の部署の後輩であり、同じスポーツジムに通っている。

前章

「頼む。

少しでもいいから金を出してくれないか。

このままでは工場が差し押さえられてしまうんだ」

義父である戸川譲（とがわ ゆずる）に土下座をされ、三室武明（みむろ たけあき）は困ってしまった。

妻である吹子（ふきこ）の父親である戸川は小さな工場を経営している。

従業員は八人ほどだ。

かつて剣道部部長を務めていた武明は工場の仲間を守りたいという戸川の思いは理解できる。

そして、心の底からの体育会系である武明にとって、目上の者の頼みというのは事実上の命令でもある。

だが、理解できることと協力できるかということは別問題だ。

武明には征人（ゆきひと）と宗臣（ときおみ）という二人の息子がいる。

息子のこれからの教育費のことを考えると、武明には、いや、妻の吹子にだって戸川のために出資できるお金の余裕などないのだ。

それを踏まえればこの依頼を断るしかない。

ない袖は振れないのだ。

「お義父さん、顔を上げてください」

武明は戸川に声をかけた。

けれど、戸川は顔を上げない。

本当に困っているのだろう。

しかし、お金に余裕がないことは変えようのない事実だ。

根っからの体育会系である武明にとって、年長者である戸川の頼みを断ることは本当に心苦しいことだ。

叶うならば、戸川の頼みに応じたい。

だが、ない袖は……

武明の脳裏に一つだけ方法が思いついた。

大学生時代の剣道部のしきたりに紐づいて思い出した方法だ。

蜘蛛の糸のように細いつながりだが、もしもそのつながりが生きているのならば、臨時収入を得られる可能性がある。

大学生時代の手帳はどこに保管していただろうか。

武明は義父である戸川に希望を持たせないようにこの場を辞してもらう方法を考えながら大学生時代のことを思い返した。

定時退社後、武明は自宅に帰らず、とあるバーで人を待っていた。

大学生時代にお世話になった人を待っているのだ。

妻である吹子には秘密にしているのだが、大学生時代の武明は普通の剣道部員ではない

経験をさせてもらった。

武明が所属していた剣道部には体育会系特有の上下関係に加えて、しきたりがあった。

それは、勃起時 18 センチメートル以上のチンポを「弛んだチンポ」として厳重な性的管理をする、というものだ。

武明は元々、勃起時 18 センチメートルのチンポの持ち主ではなかった。

けれど、上級生に陰茎増強剤を服用させられた武明は剣道部のしきたりによる「弛んだチンポ」になってしまった。

そして、武明は徹底した射精管理に加えて、チクニー調教やディルドによるアナル調教、イラマチオや合宿先の村人たちへのアナル接待など様々な辱めを与えられ、武明はそれらを遵守すべき剣道部のしきたりとして受け入れてきた。

その厳重な性的管理の一環として、武明はゲイビデオに出演させられた。

今、待っている相手は武明が出演したゲイビデオ作成会社社員の安藤（あんどう）なのだ。

剣道部の当時の部長の命令で五本のゲイビデオに出演した武明は、その縁で安藤から名刺を受け取っていたのだ。

「困ったことがあったら連絡してね」と安藤に言われた当時はこんな日が来るとは思わなかった。

武明はノンケだ。

童貞より先にアナル処女を失ったとはいえ、ノンケなのだ。

だからこそ、妻の吹子との間に二児を得たのだし、剣道部から卒業した後は現在に至るまで男と性行為をしたこともない。

その武明が再びゲイ動画の世界に関わろうとは……

「お待たせ、武明くん」

サングラスをかけた安藤が穏やかな声で武明に声をかけてきた。

「急なお願いにもかかわらずお時間を頂きありがとうございます」

武明は安藤に頭を深々と下げた。

「かつての人気男優のお願いだから当然だよ。

それにしても、三十代とは思えない若々しさだね。

相変わらず魅力的で安心したよ」

安藤が武明の向かいの席に座った。

「急にお金が必要になったとは聞いたけど、君、既婚者だよね？」

「ええ」

武明は頷いた。

武明の首にはチェーンが掛かっており、その先には結婚指輪が繋がれている。

「需要があるかは分かりませんが、可能ならばまた出演させてほしいんです」

武明は安藤に頭を下げた。

「うん、トラブルに巻き込まれるのは困るから、お金が必要になった理由から話してくれるかな。

出演に関してはその後の相談、ということで」

「分かりました」

武明は安藤に事情を説明した。

義父である戸川が工場を差し押さえられないために金策に走っていること。

その金策に協力をしたいが、今の武明と吹子の収入では子どもたちの将来の教育費で手一杯だということ。

臨時の金策として思いついたのが、ゲイ動画出演だったということ。

全てを話し終えると、安藤がため息をついた。

「結論から言うとね、止めておいた方がいい」

「もう若くないからですか？」

武明の質問に安藤が首を振った。

「こっちの世界には様々な需要がある。

君みたいな正統派イケメンからぽっちゃり体系、中年、老人まで様々な需要があってそれに応じた作品がある。

僕が止めておいた方がいい、というのは、義父の借金の件だよ」

安藤がサングラスのブリッジを指で押し上げた。

「いいかい。

親戚や息子夫婦にまで借金を依頼しているということは、銀行や信用金庫からの融資を断られているということだ。

ということは多少お金を渡したところで問題が解決するとは思えないし、仮に義父が求めるだけのお金を渡せたとしても一時しのぎにしかない可能性がある。

君、既婚者だろ？

ケツでイけるとはいえ、ノンケだろ？

甲斐性なしの義父のために、したくもないことをするのは止めた方がいい。

それに、武明くんは誠実な人柄だから大丈夫だとは思うけど、後からの出演料の増額交渉にはこちらも応じることができない」

安藤の言葉は正論であった。

声の穏やかさからも武明を気遣っていることが伝わってくる。

武明も安藤の言葉が正しく、義父である戸川の状況は武明一人の支援ではどうにもならないことは理解している。

けれど、武明の中に流れる体育会系の気質が目上の者である戸川の土下座の重みを感じさせる。

戸川が土下座までしたのだから、出来る限りのことをするべきだと訴えてくるのだ。

「安藤さんのご心配はありがたいのですが、義父のためにもできることをしたいと思います」

「決意が固いようなら、仕方ないね」

武明の返答に安藤が穏やかに笑った。

「実を言うと、今、当社では武明くんにぴったりの企画があってね。

覆面既婚ノンケ男優というのだけど」

「覆面既婚ノンケ男優」

武明は安藤の言葉を繰り返した。

「既婚者というのはこの業界でも需要があるのだけど、既婚者というのは家族や会社などの立場があるから、出演を渋ることが多い。

その心理的抵抗を軽減するために覆面で出演してもらうシリーズを展開することにして
いるんだ。

武明くんも動画に顔が出ないのなら、安心して出演できるだろう？」

「それは、確かに」

安藤の言葉に武明は頷いた。

ゲイ動画に出演するうえで武明が危惧していたのは、家族に出演が知られてしまうこと
であった。

妻や息子たちがゲイ動画を見ることはないだろうが、それでも不安がないわけではない。

覆面での出演が許されるというのなら、確かに武明にとっても都合がよい。

「というわけで、武明くん。

武明という名前そのままでは身バレの危険があるし、覆面既婚ノンケ男優タケとして動
画に出演してくれるかな」

安藤が手を差し出してきた。

「よろしくお願いします」

武明はその手を握り返した。

第一話 ノンケの限界シリーズ・タケ

覆面既婚ノンケ男優として鮮烈デビューを果たしたタケ。

その限界を見極めるべく、ゴーストマンが繰り出すセクハラを受け入れるタケに禁忌は
ないのだろうか。（ストアメッセージより）

タケは四台のカメラに囲まれ、無機質な視線を浴びていた。

カッターシャツにスラックスというカジュアルな出で立ちをしたタケは、顔の上半分を
覆っている覆面さえなければ、街に立っていても違和感がないと言えた。

タケの前にゴーストマンが現れた。

「こんにちは」

「こんにちは」

ゴーストマンの挨拶にタケは返答した。

「今日は、ノンケの限界シリーズに出演していただき、ありがとうございます。

自己紹介をお願いします」

「タケと言います。

年齢は 34 です」

「34 歳には見えないね。

うん、二十代前半に見えるよ」

ゴーグルマンが感心したように大袈裟に首を振る。

確かに、タケは肌の張りや顔立ちが若く、二十代と言われても通用する。

「僕は覆面の下を知っているけれど、本当に若くてハンサムなんですよ」

「ありがとうございます」

ゴーグルマンの称賛にタケはお礼を言った。

「でも、この企画は覆面既婚ノンケ男優なので視聴者の皆様は、覆面の下のイケメンぶりを想像しながらヌいてください。

では早速脱いでいただきましょう」

ゴーグルマンの言葉に頷くと、タケはカッターシャツのボタンを外し始めた。

カッターシャツの隙間から黒のタンクトップが顔を覗かせる。

カッターシャツを脱いだタケは黒のタンクトップに手をかける。

黒のタンクトップを引き上げる手に合わせて、シックスパックの腹筋や逞しい胸板が露わになる。

タケの逞しい胸板にはチェーンで首からぶら下がっている結婚指輪が光っている。

黒のタンクトップを脱いだタケはそのままスラックスのベルトを引き抜く。

タケはスラックスのチャックを引き下ろすと、その隙間から黒のボクサーパンツが覗く。

タケはスラックスを脱ぎ、黒のボクサーパンツ一枚になる。

タケの黒のボクサーパンツはややもっこりとしており、常人より大きなチンポの存在を示していた。

タケは黒のボクサーパンツに手をかけた。

タケは大学生時代に五本、ゲイ動画に出演した。

その度にカメラの前でチンポを晒してきた。

それでもタケはカメラの前にチンポを晒すことに躊躇いを感じた。

だが、タケはその躊躇いを飲み込んだ。

この行為は義父のために必要なことなのだ。

タケはゆっくりと黒のボクサーパンツを下ろしていく。

平常時 7.3 センチメートルの陰茎の先には皮を半分ほど被った亀頭がついている。

亀頭は雁首が目立ち、包皮から覗く亀頭は黒ずんでいる。

陰囊は金玉の重みで引っ張られている。

タケは足元から黒のボクサーパンツを引き抜いた。

「タケさん、チンポが大きいね」

ゴーグルマンがタケに囁く。

「このチンポで可愛い奥さんをアンアン言わせているんだね。

セックスは週に何回ぐらいしているのかな」

「週末に二回、セックスをしています」

タケは顔を赤らめながらゴーグルマンの質問に答えた。

体育会系であり、大学生時代には理不尽な性的管理を受けていたとはいえ、タケは羞恥心を失ったわけではない。

だから、妻との秘事を口にすることが恥ずかしかったのだ。

「週に二回とは、中々お盛んだね。

好きな体位は何か？」

「ええと、挿入した状態で向かい合って抱きしめることが多いです」

「対面座位だね。

奥さんをガンガン突き上げるのは気持ちいいですか？」

「はい」

「そっかそっかー」

ゴーグルマンがタケをじろじろと眺めた。

「平日は禁欲して、週末のセックスに向けて力を溜めているのかな」

「いえ。平日はオナニーをしています」

「わっかいねー。

精力盛んじゃないか」

ゴーグルマンがにやにやと笑った。

タケは己の性欲を揶揄されているようで、居たたまれなくなった。

大学生時代に理不尽な性的管理を受けていたタケは、その反動からか、毎日射精をせずにはいられない身体になった。

タケは剣道部のしきたりを受け入れ、しきたりによって調教された己を受け入れている。

けれど、性欲が溢れる己については、チンポだけが年相応の落ち着きを知らぬようで恥ずかしかったのだ。

「奥さんとのセックスとオナニーは、どちらの方が好きですか？」

「……セックスです」

タケが返答するとゴーグルマンがにやりと笑った。

「ノンケだもんね、セックスが好きなのは当然だよ。

それじゃあ、そろそろ本気のチンポを見せてくれるかな」

「分かりました」

タケは乳首に手を伸ばした。

大学生時代に剣道部で指導されて以来、タケはチクニーをするようになった。

チンポを弄るよりも気持ちいいと思っている。

タケは己の乳首を摘まみ、くにくにと捏ね始めた。

「タケくん、いつもチクニーをしているのかな」

「はい……」

タケは快楽に顔を歪めながら頷く。

「奥さんに乳首を弄ってもらうことはあるのかな」

「いいえ、それはありません」

タケは首を振った。

「どうしてかな。

乳首、気持ちいいんでしょ？」

「男なのに、乳首で感じるって知られるのは、その……

恥ずかしくて……」

タケは顔を赤らめた。

タケは剣道部のしきたりで受けた辱めを当然のものとして受け入れている。

けれど、それを妻である吹子に話したことはない。

奇異の目で見られることが怖かったというのもあるし、童貞よりも先にアナル処女を失ったことを知られたくなかったのだ。

「じゃあ、オナニーをするときは、奥さんにばれたらどうしようとか考えながら昂っているのかな」

「……そうです」

タケは小さく頷いた。

タケの股間ではチンポが徐々に上向きに大きくなっている。

大きくなるにつれて、半分ほど被っていた包皮は高めの雁首に後退し、黒ずんだ亀頭を露わにする。

陰茎も隆々と大きくなり、胸を張るように上ぞりに勃起している。

「奥さんも知らないタケくんの秘密のチクニーが映像に残されるわけだけど、どんな気分かな？」

「恥ずかしいけど」

「けど？」

「見ている人が興奮してくれるのなら……」

その言葉はタケの偽らざる思いであった。

ノンケであるタケは、ゲイ動画に出演していても、己が性欲の対象となっているという実感に乏しい。

だから、己の収入につながる視聴者が喜んでいるのか、ということが気になるのだ。

「大丈夫だよ。」

タケくんは身体がエッチだからね」

おっと、そろそろフル勃起かな」

「そうです」

タケは乳首から手を離した。

タケの逞しい胸板では小さな乳首がピンと勃起している。

ゴーグルマンが巻き尺を取り出した。

「それじゃあ、タケくんのチンポを測らせてもらうね」

ゴーグルマンがタケの勃起チンポの根元に巻き尺の先端を当てると、ゆっくりと陰茎に沿って伸ばし始めた。

「おお、18.2センチメートルかー。」

中々大きいね」

「ありがとうございます」

タケは尻の座りが悪い思いに襲われた。

タケは大学生時代、弛んだチンポとしてその大きさを理由に辱められてきた。

だから、ゲイ動画とはいえ、チンポの大きさを称賛されるのは滅多にないことだったのだ。

そのせいか、今でもタケは己のチンポを誉められるともぞもぞと居たたまれない思いがするのだ。

「奥さんはこの大きなチンポでアンアン言わされているんだね。

こんなに立派なチンポを持っているのに、今日は男にアンアン言わされるわけだね」

ゴーグルマンがタケの勃起チンポをぐっと掴んだ。

「正直に答えてね。

男にアンアン言わされるわけだけど、気持ちよくなれそうかな」

ゴーグルマンの質問にタケは返答に困った。

大学生時代に出演した五本のゲイ動画ではタケは、厳しい射精管理の合間の射精だったこともあり大いに乱れ、ゲイセックスを享受した。

けれど、それからもう十二年が経過している。

その間、一度もゲイセックスをしていないタケは、当時のように気持ちよくなれるのか分からなかったのだ。

「……気持ちよくなれたら、いいと思います」

少し考え、タケは視聴者へのアピールも考えて返答した。

「浮気になるとは思わないかな」

ゴーグルマンの質問にタケは言葉に詰まった。

妻である吹子には、今日のゲイ動画出演の話はしていない。

当然だろう。

義父のためとはいえ、妻であり女性である吹子に、ゲイ動画に出演するなどどんな顔をして伝えればいいのだろう。

だが、妻のいる身で男とはいえ、別の人間とセックスをするのは浮気かどうかと言われて場、浮気だろう。

「ああ、そんなに難しく考えなくてもいいんじゃないかな」

タケが考え込んだせいか、ゴーグルマンが明るい声で言った。

「チンポを他所の相手にも使ったら浮気だけど、ケツを使う分には浮気にはならないって考え方もあるし、気にしなくていいんじゃないかな」

「……なるほど」

ゴーグルマンの言葉にタケは救われた気がした。

チンポを他所の相手に使わなければ、というのは詭弁だと分かっている。

それでも、妻である吹子への罪悪感が薄れる理屈なのは事実だったからだ。

「じゃあ、まずは一発射精してくれるかな」

「分かりました」

ゴーグルマンに促され、タケは再び乳首を捏ね始めた。

「ふう……はあ……ああ……」

タケの口から切ない吐息が漏れ始める。

タケの全身がうっすらと紅潮する。

タケの指の動きに合わせてタケの逞しい胸板が動き、胸板の動きに合わせてチェーンに繋がれた結婚指輪がゆらゆらと揺れている。

タケの股間では上ぞりに勃起したチンポがぶらぶらと揺れ、鈴口から我慢汁がにじみ出ている。

タケは普段よりも濃い快楽が腰の奥でうねっていることを感じた。

四台のカメラとゴーグルマン、そして、カメラの外側にいるスタッフたちにチクニーを見られているのかと思うと、秘密を暴かれている恐ろしさと恥ずかしさが燃料となって快樂の炎を大きくするのだ。

タケの脳裏に妻である吹子と、息子である征人、宗臣の顔が浮かんだ。

夫がチクニーを披露していると知ったら吹子はどんな顔をするだろうか。

あと数年で精通をするであろう征人はタケのはしたない姿に顔をしかめるだろうか。

まだまだ性の世界のことなど知らぬ宗臣は、タケの痴態の意味など分らないだろう。

こんな時に家族のことなど思い出すべきではないとタケは考えているのに、一度思い出すとタケの脳裏に家族の姿が次々に浮かぶ。

家族のために料理を作っている吹子。

剣道に夢中になっている征人と宗臣。

ベッドの中の吹子の姿が脳裏に浮かび、タケは顔が赤くなった。

これから男にアンアン言わされるというのに、吹子とのセックスを思い出すなんてどうかしている。

タケはチクニーに集中する。

乳首を必死に捏ね、摘まみ、引っ張って己の快樂を高めていく。

それに応じて、タケの勃起チンポからは我慢汁がぬとぬと溢れ、タケの勃起チンポを濡らしていく。

「タケくん、本当に乳首で感じるんだね。

チンポが気持ちよさそうに揺れているね」

ゴーグルマンがタケに囁く。

「ふう……はあ……ふう……」

タケは淫らな吐息を漏らしていく。

タケは痛いほどにチンポが勃起していることを感じた。

普段のチクニーよりもはるかに気持ちがいい。

その事に後ろめたさを覚えながらも、タケは乳首を捏ねる手を休めない。

タケの腰の奥から熱いうねりがぬつとりとこみ上げていく。

タケはそのうねりに合わせるかのように身体を揺らし始めた。

タケの逞しい肉体が蠢き、胸板に揺れている結婚指輪が輝く。

タケは二十代に見える若々しく凛々しい顔を快樂に蕩かせている。

うっとりとした目でカメラ越しに男たちを誘惑している。

タケの乳首を捏ねる手が力強さを増していく。

「ああ……いい……くうう……」

タケの口から漏れるはしたない声が粘度を増していく。

タケの股間ではパンパンに亀頭を膨らませたチンポが我慢汁で淫靡な艶を纏っている。

「タケくん、いくときはいくっていうんだよ」

ゴーグルマンの囁きにタケは頷いた。

腰の奥の熱いうねりがますます勢いを増していく。

「ああ……いきそう……いくう……」

タケは背を仰け反らせ始めた。

背を仰け反らせることで強調される胸板で結婚指輪がゆらゆらと揺れている。

タケのシックスパックの腹筋が大きく収縮する。

その動きに合わせてタケの勃起チンポが大きく揺れる。

タケは乳首を弄る指に力を籠める。

より強い刺激にタケの顔が蕩ける。

「イくの？ イっちゃうの？」

ゴーグルマンがタケの快楽を煽ろうとするかのように囁く。

「はい……イきます……イくう……イくうう」

タケが淫靡な声を上げた。

ドピュドピュ！

その声に合わせて、タケの勃起チンポが大きく揺れて鈴口から子種が勢いよく噴きあがる。

「んひい！ んふう！」

子種が噴きあがるたび、タケの全身が大きく震え、口から無様な吐息が漏れる。

噴きあがった子種がタケの両足の間の床にぼたぼたと落ちていく。

「ああ！ いい！ イくう！」

タケは一人でするときよりも気持ちいいチクニーに全身を震わせる。

タケの勃起チンポはまだまだ子種を噴き出している。

常人の一回の射精量を大きく上回る子種の量だ。

しばらくして、タケが大きく息を吐いた。

タケの指が乳首から離れる。

タケの乳首は真っ赤にそまりピンと勃起している。

タケのシックスパックの腹筋が大きく収縮する。

射精を終えたのに勃起したままのタケのチンポがその動きに合わせてぶらぶらと揺れている。

「一杯出したね、タケくん」

ゴーグルマンが床に落ちたタケの子種を指で掬い上げた。

ゴーグルマンの指に絡みついたタケの子種は証明に照らされてぬらぬらと輝いている。

「いつもこんなに沢山出すのかな」

「いいえ……」

ゴーグルマンの質問にタケは床に落ちた子種とゴーグルマンの指に掬い上げられた子種を見てから首を振った。

「普段より多く出ました……」

タケの言葉にゴーグルマンが大袈裟に頷いた。

「見られて、撮影されて、普段より感じちゃったのかな？」

ゴーグルマンの質問にタケは顔を赤くした。

実を言えばその通りなのだが、それを認めるとタケはチクニーを見られて昂る変態ということになる。

流石にカメラの前で己の変態性を肯定する度胸はタケにはなかったのだ。

「答えてくれるかな、タケくん。」

見られて、撮影されて、普段より感じちゃったんでしょ？」

けれど、ゴーグルマンはタケに沈黙を許さない。

はしたない言葉を引き出そうと質問を重ねてくる。

タケは覚悟を決めた。

「……はい。

その通りです」

「何が、その通りなのかな？」

けれど、ゴーグルマンはタケの返答に満足しなかった。

タケの口からはしたない言葉を言わせようと問いを重ねてくる。

タケはゴーグルマンの意図を理解したが、その意図に応じる度胸はなかった。

カメラの前で恥ずかしい言葉を口にすることが恥ずかしかったのだ。

けれど同時に、ゴーグルマンが望む言葉を口にするまで、問いを重ねられることも理解している。

「見られて、撮影されて、普段のチクニーよりも気持ちよくなって子種を一杯出しました」

口にして、タケは恥ずかしさで全身を震わせた。

チクニーをしているだけでも恥ずかしいというのに、チクニーを見られていつもより気持ちよくなった己がはしたなく思えたのだ。

「タケくんは見られると気持ちよくなる人なんだね」

ゴーグルマンがタケの子種を指でぬとぬと弄びながら囁く。

「折角だから、どんな味がするか飲んでみようか？」

ゴーグルマンがタケに指に絡んだ子種を差し出した。

タケは顔をしかめた。

タケはザーメンを飲んだことがある。

大学生時代のしきたりの一環で、様々な男たちのザーメンを飲まされたのだ。

時には後輩のザーメンを飲んだことさえある。

だから、ザーメンがどれほど不味くて臭いのかタケは知っている。

飲みたいなどと思えるわけがない。

だが……タケは考えた。

義父である戸川に渡すお金を用意するためにタケはゲイ動画に出演しているのだ。

ザーメンを飲むことを拒んだら、商品価値が下がるのではないだろうか。

タケは、決心した。

己のザーメンを飲もうと決断した。

「飲みます」

タケは短く告げ、口を開けた。

「エッチだね、タケくん」

ゴーグルマンがタケの口元にタケの子種を運んだ。

タケはゴーグルマンの指にしゃぶりつき、己の子種を吸った。

タケの子種は他の男たちのザーメンと変わらず、臭くて粘っこくて、飲める代物ではなかった。

けれど、タケはザーメンを飲むコツを身体に刻み込まれている。

タケは口の中にたっぷりと唾を溜め込んだ。

そして啜った子種を唾と一緒に飲み込んだ。

腹の奥から子種特有の生臭さがこみ上げてくる。

その生臭さにタケは顔をしかめた。

何度飲んでもタケはザーメンの味と臭いになれることはできない。

「奥さんは、タケくんの子種を飲んだことがあるのかな」

ゴーグルマンがタケの胸に下がった結婚指輪を指で摘みながら問いかけてきた。

「いいえ、ありません」

タケは首を振った。

フェラチオや飲精の経験があるタケは、愛する妻にあんな行為はさせたくないと思い、セックスの際にもフェラチオを求めたことはないのだ。

「それじゃあ、タケくんの子種を最初に飲んだのはタケくん自身ということかな」

「そうです」

タケが頷くとゴーグルマンが顔を近づけてきた。

「子種の味はどうだったかな。」

美味しかったかい？」

「いいえ」

ゴーグルマンの問いかけにタケは首を振った。

ザーメンを飲むたびに様々な男たちに投げかけられてきた問いだが、タケはザーメンを美味しいなどとは思えない。

「そりゃそうだよね。ザーメンだし」

ゴーグルマンが床に落ちたタケの子種を再び掬い取った。

「折角だから、もう一回飲んでみるかい？」

もしかしたら美味しいと思えるかもしれないよ」

ゴーグルマンが指に絡めた子種をタケの口元に運んだ。

飲みたくはなかったのだが、タケは出演料を貰わなければならないという思いがある。

出演料を貰う以上、手を抜いてはならないという信念から、タケは口を開いた。

ゴーグルマンがタケの口の中に子種を落とす。

何度味わってもぬめっとして生臭くて不快な代物だ。

タケは口を閉じ、口の中に唾を溜める。

そして、己の子種を飲み込んだ。

「どう？」

今度は美味しくなったかな？」

「……いいえ」

タケは顔をしかめて首を振った。

こんなものを美味しいはずがないと心の底から思った。

腹の奥からこみ上げてくる生臭さで気分が悪くなりそうだ。

「うーん、残念」

ゴーグルマンが残念そうに呟いた。

「タケくんみたいなカッコいい既婚ノンケにこそ、ザーメンの良さを分かってほしいんだ

けどな」

「……すいません」

タケは小さく首を振った。

「じゃあ、気を取り直してアナルを見せてくれるかな」

ゴーグルマンに促され、タケは太ももを両腕で抱えてアナルをカメラの前に披露した。

「タケくんのアナル、処女みたいな綺麗なピンク色だね」

ゴーグルマンがタケのアナルにそっと指を這わせる。

「タケくんはノンケだけど、アナルの経験はあるかな」

「……あります」

タケの脳裏に大学生時代の剣道部のしきたりによりアナルを辱められてきた記憶が蘇ってきた。

ディルドでアナニーをさせられ、男たちに生チンポで犯されたのだ。

「タケくんにはアナルの経験があること、奥さんは知っているのかな」

「いいえ、知らないと思います」

タケは首を振った。

タケは大学生時代に所属していた剣道部のしきたりについて、妻である吹子には話していない。

タケは剣道部のしきたりについて恥じることはないのだが、女性である吹子にフェラチオやアナルセックスの経験があるなどと、男として話せるわけがない。

「そっかー。

ところでタケくんは、女性とのセックスと男性とのセックス、どちらの方が好きかな」

「女性とのセックスです」

タケは即答した。

男に犯されるアナルセックスでも快感を得ることはできるが、ノンケを自認しているタケにとってアナルセックスは異常なセックスでしかなく、必要がなければしたくないセックスだ。

一方の女性とのセックスは、男としての全能感と征服欲が満たされる。

ノンケであるタケにとって男としての全能感と征服欲は快楽を燃え上がらせる燃料であり、男に生まれた悦びを感じさせる大事な要素なのだ。

「アナルセックスは気持ちよくないのかな？」

「……いいえ」

タケは首を振った。

タケがアナルセックスで感じることはできるのは事実であったからだ。

「アナルで感じるけど、チンポを使うセックスの方が好きってことかな」

「そうです」

ゴーグルマンの言葉にタケは頷いた。

ゴーグルマンがタケの首にかかった結婚指輪を摘まんだ。

「奥さんに話していいかな？」

タケくんはアナルで感じる男ですよって」

「困ります」

タケはゴークルマンの言葉に即答した。

妻である吹子に愛されているという自信はタケにはある。

けれど、その愛をもってしても、タケは剣道部のしきたりによって辱められた己を受け入れてもらえるか自信がなかったのだ。

「冗談だよ」

ゴークルマンがにやりと笑った。

ゴークルマンが結婚指輪から手を離すと、ディルドを手を取った。

「タケくんは、アナルセックスは何日ぶりかな」

「およそ十二年ぶりです」

タケの返答にゴークルマンが口笛を吹いた。

「アナルセックスで感じるのに、十二年も我慢できたんだね。」

アナルが疼いたりしなかったのかな」

ゴークルマンがディルドにローションを塗りながらタケに問いかける。

「いいえ、疼いたりしません」

タケは素直に答えた。

アナルで感じることは事実だが、タケはノンケなのだ。

だから、アナルセックスを求めてアナルが疼いたりすることなどなかったのだ。

「そっかー。」

それじゃあ、今日からアナルが疼いて仕方なくなるといいね」

ゴークルマンがタケに見せつけるかのようにディルドを突き付けてきた。

タケが過去に受け入れてきたチンポやタケ自身のチンポに比べれば慎ましやかなサイズのディルドであった。

これならばすんなり入るだろうとタケは思った。

「それじゃあ、そろそろ挿入するよ」

ゴークルマンがタケのピンクアナルにディルドを押し当てた。

タケのアナルは抵抗もせずにディルドを飲み込んでいく。

「おおお……おああ……」

アナルを広げられる感覚に、タケは声を漏らした。

およそ十二年ぶりのアナルセックスではあったが、しきたりの名のもとに辱められてきた当時の感覚が全身に蘇ってくる。

空っぽの雄膣を圧迫される被虐にタケの雄膣が切なく収縮する。

男を欲情させることを、男を射精させることを求められていた当時の感覚がタケの雄膣にディルドを抱きしめさせる。

「十二年ぶりなのに、あっさり入ったね、タケくん。」

もしかして、毎日アナニーをしていたのかな」

「いいえ……いいえ……」

タケはゴークルマンの揶揄に首を振った。

タケ自身意外だったのだ。

十二年ぶりに使うアナルがこんなにも簡単にディルドに馴染んでしまうとは思わなかったのだ。

「その割には、タケくんのアナル、ディルドに馴染んでいるよね」

「おああ……ああ……」

ゴーグルマンにディルドを出し入れされ、タケは吐息を漏らした。

雄膣が空っぽになる解放感と雄膣を満たされる充足感を繰り返され、タケの全身が火照っていく。

ギンギンに勃起しているタケの上ぞりチンポから我慢汁がぬとぬと流れ始める。

「タケくんのチンポも悦んでいるね。」

アナルをほじられてチンポギンギンにして、これで女の人とのセックスできるのかな」

ゴーグルマンがタケの鈴口に指を当て、鈴口と指の間に我慢汁の糸を伸ばした。

「タケくん、子づくりセックスとアナルセックス、どちらの方が気持ちいいかな？」

「子……子づくりセックス……です……」

ディルドに雄膣を揺さぶられ、途切れ途切れになりながらタケは返事をする。

「アナルセックスよりも、奥さんとのセックスの方が好きかい？」

「はい……」

タケは頷いた。

アナルセックスには支配される屈辱が伴う。

排泄器官でしかないアナルを性欲のはけ口として消費される恥辱を伴う。

それに対して、女性とのセックスではタケは支配する側になれる。

主導的に快楽を味わうことができるのだ。

主導的に快楽を味わう悦びに比べたら、アナルセックスの快楽は屈辱と恥辱を伴う分、被虐の趣味のないタケにとって劣るものになってしまうのだ。

「でも、今のタケくんは、男にいいようにされるんだよ。」

アナルで男を抱きしめられるようにディルドで復習しようね」

ゴーグルマンがタケのアナルにディルドを出し入れする。

ディルドを挿入されるたび、タケの身体は支配される被虐を思い出す。

ディルドを引き抜かれるたび、タケの身体は受動的に快楽を味わわれる屈服を思い出す。

ディルドを出し入れされるたび、タケの身体は十二年の空白を乗り越えて、男に犯される身体としての己を思い出していく。

アナニーでトコロテンをすることさえできた当時の感覚が蘇り、タケの雄膣を熱く滾らせる。

「はあ……はあ……うああ……」

ディルドで雄膣を揺さぶられるたび、タケは欲情に満ちた吐息を漏らす。

タケの逞しい肉体は火照り、汗を流し、タケの健康美を徐々に淫靡なものへと塗り替えていく。

タケの身体が発する淫靡な色気にゴーグルマンの息がねっとりとする。

ゴーグルマンの股間では、タケという獲物を前にして競パンが隆々と盛り上がり始めた。

「タケくん、そろそろチンポが欲しくなったんじゃないかな」

ゴーグルマンが競パンの紐をほどき始めた。

タケの男としての自意識は、チンポを前にして身体を強張らせる。

けれど、タケの意志は、チンポを忌避する己を押さえ込む方法を知っている。

剣道部のしきたりの名のもとに、幾度となく男に犯されてきたタケだからこそ、その方法を身に着けたのだ。

タケは呼吸を繰り返すことを意識する。

ノンケとして男に対して感じる潜在的な嫌悪感に蓋をする。

ゴーグルマンが競パンから勃起チンポを取り出した。

挿入されているディルドよりも大きく長いチンポは、亀頭が黒ずんでおり、幾度となく男を犯してきた風格を漂わせている。

ゴーグルマンがタケのアナルからディルドを引き抜いた。

「ほら、見てごらん、タケくん。

これがタケくんをもう一度アナル奴隷にするチンポだよ」

アナル奴隷という言葉にタケの雄膺が切なく疼いた。

タケの潜在意識において、他人の勃起チンポと快楽は分かちがたく結びついている。

剣道部のしきたりの名のもとに射精管理も受けていたタケにとって、アナルセックスは射精を許された機会でもあったからだ。

タケのノンケの自意識が他人のチンポを忌避する一方で、タケの潜在意識はチンポによって得られる快楽を想起する。

「タケくんも、十二年ぶりにアナル奴隷になりたいよね」

ゴーグルマンが勃起チンポをタケの顔に近づけながら囁く。

タケはアナル奴隷になどなりたくない。

ノンケとしての自意識がそんな無様なことを拒もうとする。

けれど、タケはその自意識に蓋をする。

戸川に渡すお金を得るために、ゲイ動画に出演することを選んだ時点で、タケはノンケとしての己を踏みにじる決断をしているのだ。

「はい……

俺をアナル奴隷にしてください……」

だから、タケは己を辱める言葉を口にした。

「いい子だよ、タケくん」

ゴーグルマンがタケの頬に勃起チンポをピタンと押し当ててきた。

そして、ゴーグルマンがタケの尻を抱え込み、勃起チンポをアナルに押し込んだ。

「おおん……おああ……」

ディルドよりも濃厚な快楽がタケの雄膺を燃え上がらせた。

チンポで犯される恥辱、チンポで犯される時ならば射精を許された記憶、前立腺を抉られる悦びなどが合わさり、燃え上がり、タケの全身をますます火照らせていく。

「タケくんのアナル、男を悦ばせる機能に特化しているね。

締め付けがきつすぎず、緩すぎず、男を咥えこんで離さない天性の魔性だよ。

こんなアナルを持っていて、ノンケだなんて、才能の無駄遣いだよ」

ゴーグルマンが情欲に潤んだ目でタケを見つめている。

その表情にタケは、かつてタケを犯していった男たちの表情を重ね合わせる。

タケの雄膺はタケの意志とは無関係にゴーグルマンの勃起チンポを抱きしめ、射精を促

していく。

「ふうう……おああ……くうう……」

タケの口から漏れる喘ぎ声にも淫靡な艶が垣間見える。

タケは十二年ぶりのアナルセックスにも関わらず、十二年前と同じように勃起チンポで感じる事ができているのだ。

「タケくんの勃起チンポ、我慢汁がいっぱい溢れているね。

俺のチンポ、そんなに気持ちいいかい？」

タケを犯しながら、ゴーグルマンがタケに問いかける。

ノンケとしてのタケの自意識はゴーグルマンの問いを否定したい。

けれど、タケの意識は、そのような返答はゲイ動画に相応しくないだろうと判断をする。

それに、チンポで感じていることは事実なのだ。

嘘をつくことはタケの好むことではない。

「きもち……いいです……」

だからタケは情欲に潤んだ目でゴーグルマンを見つめながら、正直に答えた。

「何が、気持ちいいのかな」

ゴーグルマンが性のピストン運動を止めて、タケに問いかけてきた。

与えられてきた快楽の中断にタケは切ない声を漏らす。

「ほら、何が気持ちいいのかははっきり言わないと、続きはお預けだよ」

ゴーグルマンがタケの胸にぶら下がった結婚指輪を摘まみ、タケの目の前に差し出す。

「奥さんとの愛を誓った結婚指輪の前で言ってごらん。

タケくんは、アナルで男を抱きしめて気持ちよくなっていますって」

タケはゴーグルマンが差し出した結婚指輪を見つめた。

妻である吹子との愛を誓った結婚指輪の前で浮気に等しい言葉を宣言することはタケの心に重くのしかかる。

タケの雄膣が切なく疼く。

十二年ぶりに目覚めた雄膣が、チンポを求めて疼いている。

ゲイ動画である以上、タケはゴーグルマンの言葉に従うべきだと分かっている。

けれど、愛妻家であるタケにとってゴーグルマンが求める言葉は重いものであった。

「ほら、チンポで犯されて気持ちよくなりたいだろう？」

ゴーグルマンが快楽を盾にタケを追い詰めていく。

タケは己の心に蓋をする。

「俺は、アナルで男を抱きしめて気持ちよくなっています」

タケが屈辱を飲み込んでゴーグルマンの求める言葉を口にすると、ゴーグルマンが満足そうに笑った。

「そうだよ、タケくんはアナルで男を抱きしめるエッチな男の子だよ。

タケくんはエッチだから、チンポ欲しさにいやらしい言葉を口にできるんだね」

ゴーグルマンが再びタケの尻を掴んだ。

「ほら、ご褒美にチンポをあげるよ」

ゴーグルマンがタケの雄膣をチンポで突き上げ始めた。

「おお……ああ……うう……おああ……」

タケの口から断続的に淫らな吐息が漏れていく。
タケの股間では勃起チンポが我慢汁をぬとぬと流している。
「タケくんのアナル、俺のチンポに縋り付いていやらしいよ。
男を善がらせるために生まれたアナルだね」
ゴーグルマンに言葉で煽られ、タケは羞恥に震える。
タケは腰の奥で熱いうねりを覚える。
トコロテン射精の兆候だ。
十二年の時を越えて、タケの身体は剣道部のしきたりに支配されていた感覚を思い出す。
トコロテン射精が貴重な快楽であった記憶が、ケツの快楽を燃え上がらせていく。
「ああ……いい……もっと……いい……」
タケの口からチンポを求める言葉が溢れ出す。
「チンポが欲しいんだね、いいよ、好きなだけ味わいな」
ゴーグルマンが性のピストン運動を早めていく。
タケの逞しい胸の上で結婚指輪が激しく弾む。
「イク……イク……イクっ……」
タケが背を仰け反らせた。
隆々と勃起しているタケのチンポから子種がぬとおつと流れ出る。
タケは目をとろんとさせ、快楽に全身を震わせた。
二回目の射精だというのにタケの子種はとろとろと長く垂れている。
「タケくん、一杯ザーメンを出したね。
ケツで男にイカされて気持ちよかったのかな」
「はい……」
快楽に溺れたタケは、見栄も外聞もなく素直な気持ちで返事をした。
「十二年ぶりのアナルセックスだけど、感想を教えてくれるかな」
「……十二年ぶりだけど、気持ちよかったです」
そのタケの言葉が嘘ではないことは、快楽に蕩けた表情と二回目の射精とは思えないほどの量が流れ出た子種からも明らかであった。

奥付

『覆面既婚ノンケ男優タケ・上』より、前章、第一話

初出：2021年7月31日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep